

スポーツに内在する問題について(4)

— スポーツ選手の倫理観 —

岡 部 修 一

Essay of the inherent problem of sports (4)

— The ethic of the athlete —

Shuichi Okabe

はじめに

昨今、大学の体育会運動部員の不祥事、事件が頻発、大学スポーツ界の根幹を揺るがせている。

性犯罪の他、強盗、窃盗、恐喝、大麻などその内容も悪質化しており、スポーツマンシップやフェアプレー精神に象徴される、ルール（法令）遵守や自律、規範意識などを兼ね備えるべき大学生のスポーツ選手が、いとも簡単に悪事に手を染める風潮には愕然とさせられる。

むろん彼らスポーツ選手が人格的に完成され聖人君子であると言うつもりはない。ただ名門あるいは強豪と称される大学運動部に所属する選手は、選ばれた存在いわばスポーツエリートであり、部員として真摯に競技活動が続けていくことで、就職はじめさまざまな恩恵を受け、その経歴が人生において有形無形のプラスに働くことも多い。もちろん若い時代にはなかなか遠い将来に思いが及びにくいものであるし、またプロスポーツ選手をめざす場合を除いて、自らの人生を有利に運ぶためというような功利的な考えでスポーツに取り組むことは多くないかもしれない。

それにしても大学の運動部員が、スポーツの一般的なイメージである清々しさ、公正さとは対極にあるような犯罪に手を染め、しかも多発する状況というのはいったいどうしたことなのか。

トップレベルの名門運動部に所属する誇りや自尊心、また自らが打ち込むスポーツに対する畏敬の念、真摯な思い、情熱などはどこに消えてしまうのか。

そこには大学スポーツ界特有の理由や要因があると考えられる。厳しい競争原理の世界では必ず主力選手としての座が約束されているわけではなく、ケガや故障によって活躍できなくなるケースもある。スポーツだけに専念するような生き方を送ってきた人間が、そのような挫折や行き詰まりに直面したときに問題が生じることが高いのではないか。大学スポーツをめぐる事件、不祥事の続発という現状、大学スポーツを揺るがす危機的状況といえるこの憂うべき事態について考察する。

大学スポーツにおける事件、不祥事

2004年から2009年秋までに発覚した、大学スポーツ関係の事件、不祥事の主なものである。

- ①北九州市立大学 硬式野球部 複数部員がわいせつ行為。1人が逮捕され罰金刑、3人が家裁送致。
(2004年2月)
- ②国士舘大学 サッカー部 18歳未満少女との集団淫行事件。児童福祉法違反等で部員15人逮捕。
(2004年12月)
- ③亜細亜大学 硬式野球部 集団強制わいせつの嫌疑で5人が逮捕。主犯格1人のみ起訴。
(2004年12月)
- ④日本体育大学 スキー部 女子部員への婦女暴行未遂などの疑いで部員2人逮捕・起訴。
(2004年12月)
- ⑤京都大学 アメリカンフットボール部 部員3人による泥酔した女子学生2人への強姦罪。
(2005年12月)
- ⑥明治大学 応援団リーダー部 先輩部員からの暴力を苦に3年生部員が自殺。
(2007年7月)
- ⑦同志社大学 ラグビー部 2人がわいせつ目的略取容疑で起訴、執行猶予つき判決。
(2007年10月)
- ⑧関東学院大学 ラグビー部 大麻栽培・吸引で部員2人逮捕。12人が大麻吸引で書類送検。
(2007年12月)
- ⑨立命館大学 応援団リーダー部 暴力事件が判明。部はその後解散。
(2008年3月)
- ⑩日本大学 スキー部 部員が強姦致傷事件。その後同部は虚偽報告でインカレ出場停止。
(2008年7月)
- ⑪愛知学院大学 男子バレーボール部 後輩部員から150万円を脅し取った部員2人が恐喝容疑で逮捕。
(2008年11月)
- ⑫東洋大学 陸上競技部 部員が強制わいせつ現行犯で逮捕。
(2008年12月)
- ⑬京都教育大学 体育会系部活動合同コンパでの準強姦容疑で学生6人逮捕。
後に示談が成立し6人全員不起訴。
(2009年3月)
- ⑭天理大学 男子ホッケー部 部員2人による窃盗事件。3か月の対外活動禁止処分。
(2009年3月)
- ⑮日本体育大学 陸上部 合宿所で大麻を栽培、大麻取締法違反(栽培)容疑で男子部員逮捕。
(2009年3月)
- ⑯奈良産業大学 硬式野球部 元監督が部員を利用し、経営する整骨院療養費の不正受給。
(2009年5月)

- ⑰近畿大学 ボクシング部 強盗容疑で2人が逮捕される。ボクシング部は廃部。
(2009年6月)
- ⑱大阪経済大学 ラグビー部 部員3人が大麻取締法違反の容疑で逮捕。
(2009年6月)
- ⑲大阪経済大学・立命館大学 ラグビー部 複数の部員やOBがアダルトビデオに出演、退部処分。
(2009年6月)
- ⑳関西大学 硬式野球部 部員3人が恐喝未遂容疑で逮捕。
(2009年8月)
- ㉑日本体育大学 レスリング部 部員が婦女暴行容疑で逮捕。
(2009年9月)

わずか5年余りの間に、明るみに出ただけでも、大学スポーツ界でこれほどの事件が頻発している。この中には、その競技で大学日本一を成し遂げた名門運動部があれば、オリンピック代表やプロ選手を数多く輩出する強豪運動部もあり、また教員養成系大学までもが含まれている。

事件内容は日常的に新聞の社会面に掲載される一般の犯罪事件と何ら変わらない。

性犯罪が目立つのは、年齢的に性的関心や欲求が高い時期であり、安直な集団心理で仲間と共謀し、強固な体力に任せ欲望の赴くまま振舞う、まさに卑劣極まりない行為である。

大麻に代表される薬物事件は、昨今大学生の大麻所持や大学構内で売買する等の事件が頻発しているが、安易な気持ちで大麻に手を出す、そういった社会風潮に流された興味本位による軽佻浮薄さの発現でしかない。

もちろん一般の大学生の間でも、事件、不祥事は多発しており、運動部員だけを特に問題視するのは、偏向しているかもしれない。しかし、スポーツに取り組む青少年の多くが進路として目標とし、また社会的認知度の高い大学運動部で、これほど頻繁に刑事事件や不祥事が発生している事実は、大学スポーツの将来を考えるうえでも看過できるものではない。

大学スポーツ界の問題点

1. 大学の「広告塔」

入試広報戦略の一環としてスポーツ強化を図る大学が数多く存在している。

競技実績だけで入学した選手たちは、大学にあってもプロのように練習に専念したい気持ちが強い。スポーツの能力を評価されて入学したという特権意識から生じる甘えの構造と相まって、もとより学業への意識は希薄である。さらに基礎学力が身につけていない状況も重なれば、大学の講義についていくことができず、学業への興味関心を喪失してしまうケースが少なくない。スポーツ推薦入学制度の拡大でスポーツ成績は向上するものの、運動部員と一般学生との間に大学生活への価値観や軸線といった面

でかけ離れてしまう。

大学側は競技活動だけでなく学業も重視させているというものの、現実的には徹底できていないことがほとんどである。試合や競技会で好成績をあげ大学の名を高めてくれるのであれば、大学側として学業の拙さや不出来は大目に見ようとの傾向が見受けられたり、大学内の運動部関係者から「大目に見てやってもらいたい」との要望が出されたりもする。いわば大学の広告塔なので優遇してやってほしいということだ。

この「優遇」という言葉の範疇は難しい。例えば高校時代からスポーツでの優遇を受けてきた学生の基礎学力不足をサポートする教育システムを設けることは優遇ではない。もちろん一般学生も対象とするような上で、これは今日の問題である大学生の基礎学力低下に対する教育対応策である。

しかし、出席日数の著しい不足や全く勉学に取り組む意思のない学生に、無条件に単位認定し、甘い評価を行なうのは明らかに誤った優遇である。スポーツ推薦で入学させた選手である彼らが広告塔としての役割を担い、競技活動で好成績をあげることで大学へ貢献しているにせよ、そのことと単位認定や卒業を引き換えにすべきではない。

「広告塔」に対する大学側の遠慮や甘やかしの構図、そして選手側の甘えの構造、これらが重なり合うことは、学業をないがしろにする大学生スポーツ選手を乱造することになる。

スポーツジャーナリストの玉木正之氏¹⁾は「大学はスポーツを行う場ではない。体育会系運動部は解体されるべきである。」との寄稿の中で、『欧米からの輸入文化としてのスポーツは、明治以来の帝国大学を中心とする大学がその受け入れ口となったため、そのような構図にならざるを得なかった、が、まず何よりも、大学や高校や中学といった学校や、企業が中心となってスポーツが行われることは、スポーツにとって間違った構造である、ということが認識されなければならない。』と述べる。さらに『日本の若いスポーツマン（高校生）たちの多くは、自分のやりたいと思う勉学や、将来社会人として身につけるべき技能などとはまったく無縁に、スポーツを行うために大学を選び、入学を目指している。そして大学本来の責務である教育研究とは無縁のところ、大学の栄誉と利益のために利用されている。その結果、なかには大学での勉強や学問よりも、「有名」大学の「伝統」あるスポーツ部でスポーツをしていることを自慢するような学生まで存在する。それが、昨今の体育会系学生たちの引き起こした諸事件につながったと短絡的に指摘する気はないが、学生の本分はスポーツでなく、勉強のはずだ。…（中略）…そして大学は大学の本分、学生は学生の本分に立脚し、スポーツに関する学問的追究ならばともかく、大会に勝って喜ぶだけの運動部やスポーツ学生、とりわけ「体育会系的運動部」は早晚解体されるべきだろう。』と述べている。

大学は勉学がすべてであるとの意見は正論ではあろう。ただ国内にこれだけ大学が乱立する状況にあって、大学が独自に打ち出す特色ある教育理念の一環として、スポーツ強化が図られても構わないと考える。ただし大学生活をスポーツのみに特化されたものにすべきではない。大学として何を教え与え、どのような人間的成長や発展をもたらすことができるのか、このことが重要である。

例えば「大学の広告塔」たる選手たちが、競技活動ばかりに専念する学生生活を過ごすのは、学生としてさまざまな経験を積んで幅広い視野を身につけたり、人格形成や人間的成長を果たす機会をみすみす放棄することになるのだ。さらに競技の結果や勝利ばかりを期待され、運動部特有の価値観にのみど

っぷりと浸かる生活を送ってれば、社会性や常識の欠如した独善的あるいは稚拙な意識や考えを持つことにつながりかねない。大学には、彼らの人間としての成長に何らかの寄与貢献しなければならない責任がある。スポーツ選手はたとえば3時間走っておけと言われれば走る、そういった集中力や忍耐力は兼ね備えている。しかし3時間机に座って勉強しておけと言われれば難しい。そのような集中力や忍耐力は持ち合わせていないのである。しかし大学生活の中で、苦手や嫌なことにも取り組まねばならぬ現実を教え、それに対して努力する姿勢の重要性を理解させなければならない。

また日本代表に選出されるような真のトップアスリートともなれば、強化合宿、海外遠征、公式大会等、競技に関わるさまざまなスケジュールによって、仮に学業を重視したい意思があっても講義に出席ができなかったり、試験が受けられなかったりするケースがある。彼らは諸外国のプロ選手ないしプロのようなトップアマチュア選手と対峙し競っている。またJOC（日本オリンピック委員会）の強化指定選手であれば、栄養費名目で国から強化費も与えられている。このような場合、大学生なのだから学業優先などと悠長で無責任なことはできないのである。学業への意欲を示す限りにおいては、大学としてできる限りの教育サポートを構築すべきである。すなわち、スポーツばかりではなく、好むと好まざるとに係わらず学業にも勤しみ、人間的成長を図るような多様な価値観を築かせることが肝要である。

2. 指導力の欠如

大学スポーツ界をめぐる問題に関して、指導者にかかる責任は極めて重い。

指導者はスポーツを通して、部員に何を教え伝えようとしているのか。どのような姿勢で選手に接しているのか。集団におけるリーダーが、理念、進むべき方向性、モチベーション喚起などの意思統一を明確に図り、環境整備することは極めて重要である。

運動部の指導においても、かつての行き過ぎた精神論に基づく指導や、身体に負荷を与えることが目的の非科学的な練習が行われていた時代を経て、スポーツ科学が発展し、その情報がどんどん社会へ啓蒙される時代となった。根性論や経験主義だけに基づく指導は少なくなり、武道における心・技・体の概念を受けた、スポーツパフォーマンスを向上させるため体力・技術・心理（メンタル）の充実を図ることが重要視されている。

しかし勝つことがすべてとする勝利至上主義や、技術向上に偏重した指導方針、さらには行き過ぎた競争原理といったものが、とくにスポーツ推薦制度により競技能力に秀でた選手を多数かかえるような大学運動部では、競争に敗れ去った者の挫折や鬱屈、喪失の感情を昇華させられないまま、放置しているケースが少なくない。

スポーツ推薦制度で大学進学するような選手は、高校時代からすでにスポーツ特待生などの立場でスポーツに打ち込んでいる者が多い。そして生活全般がスポーツ偏重になるあまり、スポーツ以外のもの、例えば勉学や社会への関心などは薄く、スポーツの能力さえ高ければよい、あるいはスポーツ選手としての強さがすべて、といったような偏向した狭い価値観を抱くことも多い。

こうした高校時代は中心選手として活躍し、常に舞台の中央でスポットライトを浴び続けてきた選手

が大学では控えや下積み、あるいは戦力外などの立場に追いやられた場合、スポーツ能力の優劣だけを価値観としてきただけに、自己の存在を否定されたかのような感覚に陥ることもあるだろう。

本来、運動部内での個人の役割はいくつもあるはずだが、中心選手としての経験しか有しない者は中心選手としての立場にしか存在価値を見出せないことが多い。このような狭い価値観しか備えていない人間が中心選手から外れ、何の指導も成されなければ、チーム内に自分の居場所がないと疎外感をもち、挫折感や無力感などから、目標を失って自暴自棄な振る舞いを誘発することにつながっている。

指導者は戦力の厚みを求め過ぎるあまり、必要以上の選手を獲得しようとする。選手たちは大学でも自分は中心選手として活躍できる舞台があると疑いもせず進学してくる。しかし現実には厳しい競争が待ち受けており、競争に敗れたり指導者の考えなどによってチーム強化の構想から外れるケースもある。そういった構想外や戦力外の選手に対して、何の指導も役割も与えることなく「自分で考えろ」と放任することは指導者としてあまりに無責任であり、十分な指導やケアが出来ないのであれば、多くの選手を獲得すべきではないだろう。

指導者は常に考えなければならない。選手たちに何を教え人間形成の上でどんな影響を与えることができているかを。

大学でのスポーツ活動を通じ、勝つことばかりに執着し過ぎず、技術を教えるだけでなく、感受性豊かな人間形成の場を与えることができたろうか。スポーツへの畏敬の念や人間への尊厳を感じ取れる、多様な価値観を認める人間を育てることができたか。部員全体に自己実現や充実感を味わわせる機会を作ってやれたか。試合に出る選手だけを評価し、それ以外の選手は相手にしないというような無責任なチーム運営はしていないか。

指導者が、人間としてまだ未成熟な学生選手たち、特に「その他大勢組」の部員に対してもしっかりとした指導やコミュニケーションをとり、人間形成のうえで影響を与えることが出来れば、これほど無節操な犯罪が多発する事態に陥ることはないはずである。指導者の責任は極めて重大である。

3. 伝統的体質と選手の人間的未成熟さ

日本の大学スポーツでは長きにわたり、年功序列に基づく縦社会の封建主義が形成され、その構図は「4年神様、3年貴族、2年平民、1年奴隷」などと揶揄されてきた。かつて運動部の封建主義には、陰湿ないじめやシゴキとして社会問題や人権問題になるようなことが数多く含まれ、そして年齢による縦社会は大学だけでなく、高校や中学の運動部にも存在していた。

上級生の理不尽で非人間的な要求や命令を下級生はじっと我慢や辛抱させられ、そうすることが忍耐や精神的強さの形成につながるとの非論理的な理屈がまかりとおっていた。

しかし現在では、体力や技術と同様、精神面も科学的に強化するメンタルトレーニングの導入や、個を尊重する風潮、そして学校での理不尽や不条理さに対する過敏な反応などの社会情勢の変化を受け、一部の強豪を除いて、運動部の封建主義もかなり緩やかなものになってきている。

日本の大学運動部に封建主義が広まった理由として、前出の玉木¹⁾は『スポーツとは本来「実力」

(体力と技術)のみで評価される世界だが、それは本質的に反社会的な価値観ともいえる。日常の社会では長幼の序を尊び弱者を助け、ともに生活を営むものである。しかしスポーツでは、スポーツにおける実力者がその実力だけで評価される。そのような反社会的価値観を、大学(などの学校教育の現場)で教育するわけにはいかない。本来ならば、スポーツとは本質的に反社会的な価値観を含むものであり、スポーツでの価値と社会における価値は異なる、と教育すればいいのだから、「スポーツ=教育」という建前を前提にして学校(大学)でスポーツを推奨しているものだから、そのような二分論は入り込む余地がない。そこで学校(大学)のスポーツ部に長幼の序をはじめとする「社会的価値観」を持ち込んだ。本来相反する価値観を強引に持ち込むには、一般社会に存在する以上の強い規則が必要となる。そうして、先輩の命令には絶対服従、上意下達の「体育会系」という少々奇矯な社会が生み出された。』と述べている。つまり本来スポーツとは、年齢も経験も出自も関係なく、その能力だけで評価されることこそが公正なはずで、現に例えば大相撲界はまさにその実力主義が徹底されている。ただし相撲部屋では「無理偏に拳骨と書いて兄弟子と読ませる」などという形容もあり、大学運動部とは異なる形での理不尽さは存在しているようだ。

しかし日本型社会構造に基づく学校教育の中では、年齢にかかわらずとの部分が許容することできず、能力にかかわらず年齢(学年)を最大の価値基準にしてしまっている。』と述べている。

そもそもスポーツは教育に向くのだろうかと考えることがある。もちろんスポーツにはさまざまな競技形態があり、個人で記録に挑んだり演技を行う場合などは別だが、例えば対戦型競技の場合であれば、弱点を攻める、相手のペースにさせない(ペースを乱す)、相手の考えの裏をかくなどの作戦がごく当たり前に行われる。しかしこれらは表現を変えれば、ルールに基づいた「弱い者いじめ」であり「嫌がらせ」でもあり「騙し合い」ともいえる。

スポーツマンシップに則り、正々堂々と全力を尽くし「弱い者いじめ」と「嫌がらせ」と「騙し合い」を行うというのがスポーツである。勝ちにこだわらなければ、これらの側面は希薄にはなるだろうが、自己を磨き上達を果たし、その結果として勝つ経験を得ることもスポーツの大きな楽しさ、面白さの部分である。そして勝つためには、ルールに従った形での「弱い者いじめ」「嫌がらせ」「騙し合い」が行われるのである。

スポーツのこれら矛盾した部分をどのように教え導いていくのか。

たとえスポーツに秀でていても、選手たちは人間的にはまだまだ未成熟であることが多い。

スポーツの能力の高さや勝利することだけに価値を見出し、強さばかりにあこがれる。

スポーツ以外、社会への関心も薄く、人格陶冶や倫理観の構築も進まない。その一方で高校時代までのさまざまな制約が外れ生活の自由度が高まることで、スポーツ一辺倒から娯楽や遊びの楽しさを知る。場合によってはそれらにのめりこんでしまうこともある。

スポーツの能力を評価されスポーツ推薦制度で大学に進学したものの漫然と過ごしていると、やがて試合出場もかなわない戦力外のような立場に追いやられる。さらに試合に出られないことや自分が競技に真摯に向き合わず努力もしないことを「監督が悪い」「チームが合わない」などと責任転嫁し、鬱屈した心情や思い通りにならない欲求不満を、運動部の封建主義に威を借りて鬱憤晴らしをする。要するに人間形成ができておらず、人格的に幼いままであり、そのような状況が極端に至った場合、犯罪とい

う結果が生じてしまうのである。

4. まとめ

スポーツ選手は成熟するにつれ、社会の動きや他者に対する関心、気配りが出来るようになる。

まず自分がスポーツに邁進できるのは、家族やスタッフ、仲間など多くの人の支えがあってこそと気づき、感謝の念を強く持ち始めるのだ。プロスポーツ選手やトップレベルのアマチュア選手がインタビューで「周囲の支えてくれる人たちのおかげです」と述べる姿は頻繁に見られるし、ボランティア活動やさまざまな社会貢献などに熱心に取り組むスポーツ選手も増えてきた。とくに体が資本で身体や体力に意識が強いスポーツ選手は、病気やハンディキャップのある人たちを支援しようとすることが多い。

また勝つことを追求していく中でも、勝利者の陰には多くの敗者が存在し、彼らがいてこそその勝利の栄冠であることを理解して、敗者に対する尊厳を感じるようになる。

そしてもちろんスポーツにとって勝利は重要な要素であるが、その過程で自分を高める努力や精進をどれだけ重ねてきたか、どのように取り組んできたかを重視し、本当の意味でスポーツや勝負を楽しむようになっていく。すなわちスポーツの根源的な価値に触れることができるのである。

これは人間形成や人格の陶冶がもたらしたスポーツ選手としての高みに至ったものであり、この進歩と成長こそ、スポーツに求められる。

高校生の頃からスポーツの才能をもてはやされ、大学へもスポーツ推薦で入学し特別扱いされることを当たり前になり、講義もおろそかにすれば、せつかくの人間形成、成長の機会を失ってしまう。

勝利至上主義に執着し、技術向上ばかり優先するあまり、人間教育をおろそかにすれば大学スポーツ界に未来はない。学業や遊びもある豊かな大学生活こそ人間形成につながる。これこそが大学スポーツの目指す目標であろう。

引用文献

- 1) 玉木正之 「Camerata di Sport 大学はスポーツを行う場ではない。体育会系運動部は解体されるべきである」
(タマキの蔵出しコラム/2008)
http://www.tamakimasayuki.com/sport/bn_114.htm

参考文献

- 毎日新聞特集 「くりかえされる大学スポーツ界の不祥事」(2007)
- 川谷茂樹 「スポーツ倫理学講義」 (ナカニシヤ出版/2005)
- 近藤良享 「スポーツ倫理の探求」(大修館書店/2004)
- 中山和義 「スポーツから気づく大切なこと」 (実業之日本社/2008)